

# マタタビ

牧 幸 男

梅雨のシーズンの「半夏」の頃、山中で葉の先を白色に変色する植物がある。マタタビの木で、良く観察すると梅の花に似た白花も咲いている。花は梅の香に似た良い香りがする。

マタタビは、山地に生育しているサルナシ科の雌雄異居性の落葉つる植物。枝は良く伸び、褐色で若い枝には細かい毛があり、木部はやや辛い味がする。蔓の成長は早く太さが直径8~10cm程に成長するものもある。葉は互生、葉柄があり10cm程の卵円系をしいる。上部の葉は半夏の頃から白粉で白く化粧したように変色する特性がある。花は葉腋に下向きに白色の梅の花の形に似た、直径2cm程の雄花と雌花を咲かせるが、時には両性花をつけることもある。晩夏



撮影：長野県薬剤師会薬草の森りんどう  
(ミヤママタタビの花)

頃表面が平滑な長楕円形で少し尖り、長さ3cmほどの先に尖った液果を結ぶ。熟すと黄色になり食用にすることがある。果実はやや舌を刺激し苦みが強いが、焼酎漬や塩漬にして保存すると苦味は減る。保存の理由は、疲れ切った旅人が、この実を食べ、さらに元気百倍旅を続けたと言うマタタビ語源説と、昔から強精薬とされてきたことに由来している。故田中角栄宰相もこの効能を信じ愛用していたそうである。

類似植物にミヤママタタビがある。生育地が深山のため、目にすることは少ない。違いは半夏の頃、葉の先端が淡紅色に変色することである。科名も同じであるが、雌雄異株で葉柄がマタタビより長いので区別は容易である。また、枝を裁断するとマタタビは中心にはっきりした白い髓が見られるが、ミヤママタタビは白い髓がない。



生薬：木天蓼  
(中心に白い心があるのが特徴)

マタタビのつるは強靱なので、筏をくむ時縄として利用したり、山中の吊り橋の材料としてきた。

更に四つ割にしたものを加工して、ざるやかごを編む材料にしたり、樹皮を「火縄」の材料に利用してきた。生活に密着し古くから親しまれてきた植物である。このため『本草和名』(918)に「和多々比」、『延喜式』(927)に「和太太備」名で登場している。しかし、歌題の対象になるのは明治以降である。

木天蓼の 蔓にて籠を 編みし父 あれは習つて おけばよかつた

野林 幸彦

またたびの 花をやさしと 折れば匂う

山口 青邨

植物名について、牧野富太郎博士は、「アイヌ語のマタタムブに由来しており、マタは冬、タムブは亀の甲の意味である。これは多分、

虫癭<sup>えい</sup>になった果実に、凹凸がある塊のような感じになる事に対して呼んだ名前であろう。

生薬のマタタビは従来言われているように、その果実を食べて元気を回復し、また旅をするという意味の語原は信用できない。更に、漢名は木天蓼<sup>もくてんりょう</sup>を使うことがあるが違っている。」

と述べている。別名の夏梅は、花が梅の花に似ていて夏咲くから、その他にタビグサ、ネコナブリ、ウラジロなど沢山の名前がある。学名は *Actinidia polygama* で、属名は柱頭が放射線



生薬：マタタビ(凹凸があるのが特徴)

状に並ぶことから aktis (放射線) に基づく語、種小名は雑居性花の意でこの花が雌雄雑居性によっている。

この植物は俗に「猫にマタタビ、芸者に小判、見せてくれるな目の毒だ」などと言われ、ネコ科の動物はあたかも麻薬のように狂おしく酔わせる。他に猫が好む植物に、マボウフウ科の御肉<sup>おんにく</sup> (キムラタケ) (生薬名：肉苁蓉) やシン科の筑摩薄荷 (イヌハッカ) などが知られている。但し、ミヤママタタビには猫は興味を示さない。

薬用には、果実の虫こぶを利用する。この虫こぶはマタタビの開花直前に、花の中心の子房に「マタタビノアブラムシやマタタビミバエ」が産卵すると子房は正常な果実になれず異常発育し虫癭果となり、正常な実が熟する前に落下する。この落下した虫癭果を生薬名「木天蓼」と呼び、冷え性、利尿、神経痛に利用する。その他、蔓や葉を入浴剤として、筋肉の疲れや凝りに使われる。

食用の場合、虫癭になっていない正常な果実は、熟すとそのまま食べられるが、舌に刺激が残り、美味なものではない。塩漬、みそ漬、薬用酒 (マタタビ酒) などにして利用すると良い。更に、葉をおひたしにして食べる事があるが、アレルギーを生じる事がある。

花言葉は「夢見る心地」、「晴れやかな魅力」である。猫の気持ちを表しているのか？



撮影：上田市真田町